第7回日本LCA学会研究発表会報告

第7回日本LCA学会研究発表会実行委員会

Conference Report on the 7th Meeting of the Institute of Life Cycle Assessment, Japan Executive Committee of the 7th Meeting of the Institute of Life Cycle Assessment, Japan

1. はじめに

第7回日本LCA学会研究発表会は、平成24年3月7日(水)～9日(金)の3日間、東京理科大学野田キャンパスで開催された。前号の速報に引き続き、本号では研究発表会を総括する。

2. 全体の参加者数

第7回研究発表会への全参加登録者数はTable 1に示す通り、410名であった。今回は基調講演を実施しなかったが、

Table 1. 会員区分別の参加者数(確定値)

会員区分	第7回研究発表会 参加者数	(参考)第6回研究発表会 参加者数
賛助会員	31名	25名
正会員	177名	171名
学生会員	112名	110名
非会員 (一般)	39名	45名
非会員 (学生)	51名	18名
基調講演参加者	基調講演なし	32名
合計	410名	401名

研究発表会の参加者数で比較すると、過去最大であった第5回(参加者数434名、うち基調講演のみ24名、研究発表会参加者は410名)と同じ人数に上った。

3. 各セッションの参加者数

第7回研究発表会では計196件の発表がおこなわれ、第6回の207件を下回ったものの、第5回の190件を上回り、過去2番目の規模であった(196件には、要旨を提出したが当日の発表がおこなわれなかった5件(口頭1、ポスター4)を含めていない)。内訳は、口頭発表が166件、ポスター発表が94件で、うち64件がダブルエントリーであった。

口頭発表はパラレルセッション形式で実施し、発表内容に応じて6つの特別セッションと19の一般セッションを設けた。特別セッションの詳細については、4月号に掲載された速報を参照されたい。

各セッション(パラレルセッションおよびポスターセッション)の発表件数および聴講者数をTable 2に示す(セッ

Table 2. 各セッションの発表件数とおおよその聴講人数

セッション名		発表件数	聴講者数(概数)
パラレルセッション		166	-
特別セッション	震災復興とライフサイクル思考 (1),(2),(3)	4, 5, 3	52, 62, 58
	再生可能エネルギーシステム	5	46
	企業LCA/LCM(1),(2),(3)	6, 4, 4	43, 62, 44
	環境教育 (1),(2)	4, 4	32, 38
	ニューターリズムのLCA	4	35
	一次産業と食のLCA(1),(2),(3),(4)	4, 4, 4, 3	60, 50, 50, 49
一般セッション	フットプリント	3	57
	プラスチック	5	65
	バイオエタノール	4	76
	バイオマス (1:地域事例),(2:インベントリ分析),(3:持続性評価)	4, 4, 4	59, 30, 63
	建築用木材	4	38
	化学物質	4	24
	動的MFA	6	36
	社会的環境影響	5	42
	非化石エネルギー源	4	72
	土地利用	4	67
	資源循環 (1:リサイクル技術),(2:廃棄物・循環型社会)	2, 5	47, 41
	インパクト評価	4	42
	交通 (1),(2),(3)	3, 4, 3	37, 49, 45
	経済活動と資源消費・環境負荷 (1),(2)	4, 4	37, 31
	建築・住宅 (1),(2)	4, 3	41, 41
	環境ラベル・グリーン購入	4	59
	データベース・システム (1),(2)	4, 4	41, 30
	社会資本	4	32
	エコデザイン	5	29
ポスターセッション		94	-
うち、ダブルエントリー		64	-

ション中にも人の出入りがあるため、聴講者数は概数である)。多くの参加者が震災後の情勢に興味を示し、震災対応のLCAを扱った「特別セッション: 震災復興とライフサイクル思考」と、原発や太陽電池を分析した「非化石エネルギー源」には聴講者が集まった。また、消費者に近い「一次産業と食のLCA」や「バイオエタノール」「バイオマス」「プラスチック」「環境ラベル・グリーン購入」、国際的な動向が注目される「フットプリント」「土地利用」も多数の参加者が聴講した。

4. アンケート結果

研究発表会参加者に配布したアンケートの質問項目と回答集計結果を、Table 3にまとめる。参考として過去5回(第2～6回)のアンケート結果も併記した。

多くの項目で前回までと同様に肯定的な回答の割合が高く、概ね問題のない運営がなされたと考えられる。前回までと異なる点として、開催地に関する肯定的意見がやや少

なくなっているが、これは開催地の施設等の問題ではなく、交通アクセスの問題と考えられる。開始時間に対する肯定的意見もやや少ないことから、関東地方からの来場者は近隣に宿泊することができない一方で、これまでの地方開催や都内開催と同じ開始時間としたことが開催地や開始時間に対する満足度の低下につながったと考えられる。一方、基調講演不実施を不適当とした方は25%程度とやや多かった。今回は震災対応企画の設置を検討したため(結局、通常の特別セッションとした)設置できなかったが、学会員以外の講演や環境に関する最新動向などを聞きたいという参加者も一定数存在した。学会賞受賞者講演を基調講演としては、という意見もあった。

その他、満足度が比較的低い項目について言及すると、ポスター発表についてセッション時間が短いという意見があったが、これは審査があるのにすべて回れないためと思われる。また、質疑応答時間については、時間の関係で質問件数が少なく、審査が難しいという意見があった。

Table 3. アンケート集計結果の推移

	質問項目	肯定的な回答の比率[%]※					
		第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回(今回)
発表会一般	開催地	93%	77%	72%	73%	72%	56%
	開催時期	75%	82%	88%	86%	79%	86%
	開催期間	70%	78%	89%	86%	92%	90%
	開始時間						79%
	発表申込時期	73%	71%	61%	83%	74%	81%
	発表申込期間	92%	96%	91%	92%	86%	96%
	講演要旨提出時期	81%	73%	68%	85%	80%	79%
	講演要旨提出期間	97%	96%	86%	90%	89%	91%
口頭発表	申込手順	96%	81%	84%	89%	88%	92%
	発表形式	93%	99%	98%	97%	97%	97%
	ダブルエントリー		100%	98%	94%	94%	95%
	口頭・発表時間	87%	99%	85%	86%	81%	85%
	口頭・質疑応答時間	83%	86%	84%	78%	79%	82%
	パラレルセッションの数	96%	85%	85%	75%	94%	85%
ポスター発表	口頭・会場	75%	86%	59%	87%	96%	85%
	ポスター・発表件数			90%	86%	72%	84%
	ポスター・セッション時間	76%	79%	76%	69%	78%	80%
	ポスター・時間配置	77%	97%	93%	84%	90%	91%
	ポスター・会場	34%	77%	74%	87%	78%	91%
基調講演	基調講演・内容	66%	60%	83%	91%	94%	
	基調講演・人数	79%	83%	76%	76%	98%	
	基調講演・時間	92%	77%	81%	83%	79%	
	基調講演・時間配置	85%	88%	87%	91%	88%	
交流会	交流会・内容	94%	96%	87%	97%	98%	93%
	交流会・時間	84%	96%	89%	91%	83%	93%
	交流会・日程			85%			
	交流会・開始時間	89%	90%	92%	94%	94%	88%
	交流会・会場	21%	77%	92%	100%	79%	98%
その他	オープニング不実施						88%
	基調講演不実施						75%
	参加費	65%	69%	73%	64%	77%	75%
	要旨の形式	88%	92%	92%	86%	78%	94%
	学生発表表彰	92%	84%	89%	74%	83%	83%
	次回発表・聴講意向	89%	77%	100%	82%	85%	85%

※「行きやすい」「適当」「有意義」「やや有意義」と回答したもの

研究発表会をより魅力的な発表・情報収集の場として提供していくために、各項目について今後討議をおこない、次回に向けて準備を進めたい。

5. おわりに

第7回日本LCA学会研究発表会は再度東京近郊での開催となった。今回は震災後の厳しい情勢であるにもかかわらず、過去最多の参加者が集まった。震災対応や今後の電源に関するLCAが注目を浴びるだけではなく、将来の地球環境を見据えて土地利用やバイオエタノールのセッションも多く聴講されるなど、LCAがさまざまな分野で必要とされており、参加者もそのことを強く認識していることが印象に残った。

第8回研究発表会は滋賀県草津市の立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）で開催される。BKCは、京都駅から電車とバスで40分弱と、郊外型のキャンパスながら比較的アクセスはよい。理工学部・情報理工学部・生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部・経済学部・経営学部の7つの学部をもつ文理融合型キャンパスであり、近くには日本最大の湖である琵琶湖を有し、自然環境にも恵まれている。関西圏で初めて開催される研究発表会であり、これを機に関西圏での活動の活発化が期待される。

最後に、東京理科大学現地準備委員の皆さん、会場でさまざまな手伝いをしていただいたアルバイトの学生の皆さん、参加者の対応をしていただいた学会事務局の皆さんには、研究発表会の企画から準備、運営、最後の後片付けまで多大な尽力をいただいた。この場を借りて改めて感謝いたします。